

進道村巡

全

KY291  
29



KY  
2

2016778446

春法京道乃蘇小連寺道遠村の

神社佛國海成くを日永水也く人

先可麦と打立寺道玉福翁よ訪

志保し松名城一りハ子而新翁津家

川乃浦高寺ノ名を言記袖浦里

源は水、向を牙、牧草と、昔老の赤天  
 音書史、このく、と青本、其、其、富士法  
 人、穴、眼、と、法、い、も、也、是、言、も、恒、并、法、是、以  
 過、分、二、可、有、法、意、の、新、町、保、土、谷、也  
 河、の、産、婦、と、も、や、五、事、是、く、も、夏、法、権、切

江、流、と、を、恒、所、水、の、後、の、ま、ま、と、引、出、し  
 石、水、と、白、湯、菊、石、と、を、六、角、橋、坂、渡、り、切  
 敷、と、之、法、留、佛、向、合、州、法、流、法、流、法、流、法、流  
 水、と、今、并、く、川、流、の、二、階、川、と、は、晒、也  
 市、と、行、念、切、大、寺、と、を、寺、尾、と、名、に

河上馬止お令る場福高より徳ゆきと  
駒屋の存お終終一と獅を谷に叔師屋  
の徳野之初額初書おさうりて実ある  
くまのゆきし又も橋のたる根と括ふ  
多を原を尾村大豆産條系家揚又も

市水根より留る之枝橋一物事なる水小  
夏田小札川向耕<sup>ま</sup>中<sup>ま</sup>のこつちて目先  
い鳥山後山と中山白根山はく記富の好  
土乃野右村月地川弁と山と屋屋  
山のを基と之保後とつと山よりふり





と原小田中のお堰や井田の五と河津  
谷子母古名川の海邊をまたり形化し  
久平溝口島梅原寺城傍と二つ子之内  
大と谷也る坂平杖をさす神の神地也  
今井村布坪と小杉といふ所を在る  
平間とむふ小向古川の兼師如東の本  
浪吉宮好うしお形の彦塚城也江々  
端と走る矢向の方角は南河原也さす  
はくともや川溝の張路サるは是今下江堰  
内市場菱沢瀬田といふ一谷より武士の

親孝の程も今を以て神皇の考と消えり、  
流きともあま下新田中田の山王に縁託是  
坂下の遷——とく系ハ知存中の申懸  
渡田大流の中流ともあましく大師流系  
平間寺とく——神皇の平家弘法大徳の

神皇流系四子二女の尾流と自刻の海軍  
流——あまを神皇傳ふとくと武流と一節  
海をきそあま玉川流向ハ母田弁女と終  
渡下下袋流各秋中ハ情塚にけり難  
あま蒲田梅白くさる梅をかき麦茶末細

二宮くし新成斎の坊主天教の山本斎の如  
和申教のり一客の六年一掃ハゆ舞  
鳥石飛ゆ人新首玉子舞る石初進給  
教溪川鏡削も新成斎の川宿ハ東海古  
法庵和尙の宗基こそ是也大井の法華齋  
首任係馬の脊上げけを道來の境方流  
倉とておるをさし下と池上げり寺山の根  
方と徳持より之が原をたう居塚女塚築  
立ち巡る三宮根や蓮沼の堂もおき今  
泉古市場とて天神のあまもあまの交り村

青飛の流し場次陣と忠利田大助神  
天雷除くお登茶棚て下る下丸子橋、  
本の家平と等と力のふ物の流し涼流せ  
お入し千原まほの九品仏と品への出守  
相と念ふのそく碑又言仁王門板石川也

千束の橋<sup>池</sup>の邊よりと湖中と及忠風

東の中延馬也相ヶ谷まほしき目黒の  
お勤るふと鳥合白所崎茶師一祐天寺  
とそゆとち目と大崎一寺りて後の茶合  
お茶休まほしき滋谷湯とてて名を記  
目黒を一はし

記  
日  
利

明  
年  
五  
月  
中  
旬  
自  
記

方  
安  
思  
書

武  
福  
庵  
自  
記  
之

近辺村巡全

春ノ景色乃うらうらにつれて近辺村々の

神社仏閣海山をかけて日永に巡らんと

先ず生麦を打立てて道念道念権権荷荷に詔詔でつつ

志志げし松松原原越越へいけいべべ子子安安新新宿宿神神奈奈

川乃浦島寺浦島寺に名も高き袖袖ヶヶ浦浦里里

眺眺むれれバ向向りりけ本本牧牧十二天十二天野野毛毛のの弁弁天天

吾吾宮宮ここななはは青青木木芝芝生生なるなる富富士士環環

人人穴穴覗覗ききつつつつははやや足足どりどりもも軽軽井井沢沢ここここハハ

道道分分ニニタタごごうう恋恋のの新新町町保保土土ヶヶ谷谷と

泊泊るる戸戸塚塚をを早早やや立立ちちてて是是よりより藤藤沢沢遊遊行行寺寺

江ノ島江ノ島迄迄はは程程ああれれババ後後めめははここハハとと引引返返しし

みみれればば白白樺樺菊菊名名ととてて大大角角橋橋をを渡渡りり行行きき

数数もも三三ツツ沢沢和和田田仏仏向向金金草草沢沢にに流流れれくくるる

水水もも今今井井やや川川島島のの二二俣俣川川ににかかけけささららすす

布布もも片片倉倉新新大大寺寺ここのの寺寺尾尾とと名名ににしし

のの不不馬馬上上安安全全馬馬場場稻稻荷荷ききなな由由るるささぬぬ

駒駒団団のの名名ももおおききりりしくしく獅獅子子ヶヶ谷谷ささてて師師団団

万万態態野野宮宮勅勅額額勅勅書書おおささままりりてて奥奥ありあり

かたかたささ事事ををかかしし

夫より梅の大首根を拾ふて  
たゞる太尾村、大豆戸、篠原、岸ノ根と又も  
木の根にすがりつゝ、三枚橋へ出て見れハ、  
菅田、小机川、向など本郷のこちして、目先  
ハ鳥い、猿山と中山白根、いつゝさ、闇の羽  
音の鴨居村、用地、川井や寺山と尽せぬ  
山の某台を久保榎の下とあり行ハ、北門、  
恩田、八胡と道も長津田、小山路ハ、青砥、佐  
江戸の川、繞き、川和や市ヶ尾も、賑ふ  
春め池辺に、東方よりさし昇る旭に腰も

折本の送路宮に詣つつ、大熊、新科、吉田ニ而  
袖引とめし其縁の細島、箕輪、只上なる  
華にもいさめ駒林、駒ヶ橋とてこまくと誓言を  
かけし地藏尊、爰は字の下田也、高田、久末  
清米と、野川の村の影向寺、瑠璃光仏の境  
内に市は霜月八日より十二日迄賑ふて名残を  
かけし十三日、山田妙見口拜て、花表も大  
棚、勝田村、茅ヶ崎、荏田と歩み行、はこひも  
おきき申久保や有間、馬絹の富七屋茶屋  
こゝに休らい土橋の景色を詠め二興と書き

フコリたる長尾流、切命も平にて、初山、  
菅生見おくれハ、伽藍も大場、大禪寺、三輪を  
《リて能ヶ谷に、日もまた早野、鉄と羽振口を  
つまき鶴見迄、出てしからきに打休ミ子育  
頼む子生し、儲観音の利益にてするハ末吉  
不動尊、小倉を如頼と打越せむ、鹿島田村に  
黄昏て、今宵ハお宿、木月とて澄渡リ  
たる小田中の小堰や井田に夜も明津、蟹  
谷、子母口、若川の、流れもはやき新作と語る。  
久本溝ノ口、宿トハ梅鶴、千代鶴とニタ子、宮内  
大ヶ谷、登る坂戸に杖迄ふて、神の神地や  
△井村、雨ノ坪より小杉迄いまけは丸子  
平間とて、お念小向、古川の葉師如来の大  
根杏、実珍らしと打排め、戸手、塚越や江ヶ  
崎と、走る矢向の方角ハ南河原と過ぎ  
つゝ、はや川崎の駄路なり是より下郷堀ノ  
内、市場、菅沢、潮田と、おかし名にある武士の  
親子の跡も、今は只、妙葉の露と消はせて  
流れも留ぬ下新田、小田の山玉其縁起、是  
坂本の邊しとかや、祭ハ卯月中の申、賑ハ

渡田、大嶋の中嶋迄も恙なく大師河原の  
平間寺、こゝに御堂の本尊ハ弘法大師の  
御姿を四十二歳の厄除と自刻ミ海中に  
流し給ふと聞伝ふ、こゝは武蔵を一筋に、  
流れ尽せぬ玉川の向ハ羽田弁才天、盛る  
濱所、下袋姥谷、萩中、幡塚、つづく雑  
敷、鎌田梅白ハも高き梅屋敷、蕎麦細  
工美う軒をならふる大森の、山本ならぬ  
和中散、いつしか客も不入斗、八幡ハ酒舞  
島石、罪ある人の首玉に付たる名なれ、鈴ヶ

森、浜川、鮫州、はせを堂、品川宿ハ東海寺  
次庵和尚の開基にて、是を大井の荒井宿  
貢の俵、馬の背につけて往来の提方、市ノ  
倉へとおさまりて、所は池上本門寺、山の根  
方を徳持と行、スヶ原、右、左リ道場、女塚、築  
立て、巡る三曾根や蓮沼の花も要る、今  
泉、古市場とて、天神の慮ミもはやき矢口村  
昔罪ある渡シ場を隔てぬ新田大明神、  
天雷除る取替箭、納て下る下丸子、鶺鴒ノ  
木の峯に雲々カノ、不動の瀧も深次と、

ふか入したる奥米の、九品仏にて品くの虫干  
擇ミ衾よりのそく碑又谷、仁王門、諸石川や  
千束の池の辺に（春の鳥）は湖木も及ぬ景  
景の、中延、馬山、桐ヶ谷につく目黒の  
不動尊、ならふ金比羅、蛸葉師、祐天寺  
とて廻るうち日も大崎へ暮行は藤の茶屋  
にも休らはて悲谷限りととこめ鳥見  
目出度かしく

記行も多し

日永のむらめくり

時干嘉永六年

癸丑五月下旬記え

若女児案内也

武橋庵 白紙述え

近辺村巡 全

春の景色の麓に連て、近邊村々の

神社、仏閣、海山をかけて、日永に廻らんと、  
先、生麦を打立て、道念稲荷に詣つ、

しはし松原越へ行へ、子安、新宿、神奈

川の浦島寺に名も高き、袖か浦里

眺「詠」むれへ、向は本牧十二天、野毛の弁天、

吾妻宮、こなたは青木、芝生なる、富士の

人穴覗きつゝ、はや足とりも軽井沢、爰へ

追分ニタころろ、恋の新町、保土ヶ谷と、

泊る戸塚をはや立て、是より藤沢遊行寺、

江ノ嶋迄は程あれへ、後のは「ひと引返し

見れば白幡、菊名とて、六角橋を渡り行、

数も三ツ沢、和田、仏向、金洲沢に流れ来る、

水も今井や川嶋の、二俣川にかけ晒す

布も片倉、勸大寺、こころ寺尾と名にし

あふ、馬上安全、馬場稲荷、手綱ゆるさぬ

駒岡の、名もおそろしき獅子ヶ谷に、扱、諸岡

の熊野宮、勅額、勅書おさまりて、実あり

かたき事そかし、夫より樽の太曾根を、捨てて

たどる太尾村、大豆戸、篠原、岸ノ根と、又も

木の根にすがりつゝ、三枚橋へ出て見れへ、

菅田、小机、川向など本郷のこちして、目先

へ鳥山、猿山と、中山、白根、山つゞき、闇の羽

音の鴨居村、用地、川井や寺山と、尽せぬ

山の其台を、久保、榎の下とおり行へ、北門、

恩田、八朔と、道も長津田、小山路へ、青砥、佐

江戸の川続き、つくく川和や市ヶ尾も、賑ふ

春の池辺に、東方よりさし昇る、旭に腰も

折本の、淡路宮に詣つつ、大熊、新羽、吉田三而  
袖引とめし其縁の、綱島、箕輪、矢上なる

華にもいさめ駒林、駒ヶ橋とてこまくと、誓を

かけし地藏尊、爰は字の下田也、高田、久末

清沢と、野川の村の影向寺、瑠璃光仏の境

内に、市は霜月八日より十二日迄賑ふて、名残を

かけし十三日、山田妙見口拝て、花表も大

棚、勝田村、茅ヶ崎、荏田と歩み行、はこひも

おそき牛久保や、有間、馬絹の富士見茶屋、

ここに休らい土橋の、景色を詠め一興と、書き

つゝりたる長尾流、扱、命毛も平にて、初山、

菅生見あくれ、伽藍も大場、大禅寺、三輪を

巡りて能ヶ谷に、日もまた早野、鉄と羽振口「も」

つよき鶴見迄、出てしからきに打休み、子育

頼む子生山、偕、観音の利益にて、すゝ六末吉

不動尊、小倉を加瀬と打越せむ、鹿島田村に

黄昏て、今宵只苅宿、木月とて、澄渡り

たる小田中の、小堰や井田に夜も明津、蟹

谷、子母口、岩川の、流れもはやき新作と、語る

久本、溝ノ口、宿卜、梅鶴、千代鶴と、二夕子、宮内、

大ヶ谷、登る坂戸に杖をたて、神の神地や

今井村、市ノ坪より小杉迄、いそげは丸子、

平間とて、むかふ小向、古川の、薬師如来の大

银杏、実珍らしと打眺め、戸手、塚越や江ヶ

崎と、走る矢向の方角へ、南河原と過ぎ

つゝ、はや川崎の駅路なり、是より下郷、堀ノ

内、市場、菅沢、潮田と、むかし名にあふ武士の

親子の跡も、今は只、艸葉の露と消はてて、

流れも留ぬ下新田、小田の山王其縁起、是

坂本の遷しとかや、祭、卯月中の申、賑ひ

渡田、大嶋の中嶋迄も恙なく、大師河原の

平間寺、ここに御堂の本尊へ、弘法大師の

御姿を、四十二歳の厄除と、自刻ミ海中に

流し給ふと聞伝ふ、ここは武蔵を一筋に、

流れ尽せぬ玉川の、向へ羽田弁才天、盛る

濱竹、下袋、糞谷、萩中、八幡塚、つくく雑

敷、鎌田、梅匂ひも高き梅屋敷、蕎麦細

工、美う軒をならふる大森の、山本ならぬ

和中散、いつしか客も不入斗、八幡八満舞、

鳥石、罪ある人の首玉に付たる名なれ、鈴ヶ森、浜川、鮫洲、はせを堂、品川宿、東海寺、沢庵和尚の開基にて、是を太井の荒井宿、貢の俵、馬の背につけて、往來の堤方、市ノ倉へとおさまりて、所は池上本門寺、山の根方を徳持と行、久ヶ原、右、左り、道塚、女塚、築立て、巡る三曾根や蓮沼の花も、安方、今泉、古市場として、天神の恵、もはやき矢口村、昔罪ある渡シ場を、隔てぬ新田大明神、天雷除る取替箭、納て下る下丸子、鶴ノ木の峯に等々力の、不動の瀧も深沢と、ふか入したる奥沢の、九品仏にて品くの、虫干、拝ミ衾よりのそく碑文谷、仁王門、僧、石川や千束の池の邊に之は、湖水も及ぬ風景の、中延、馬込、桐ヶ谷につく目黒の不動尊、ならふ金比羅、蛸葉師、祐天寺とて廻るうち、日も大崎へ暮行は、藤の茶屋にも休らはて、渋谷限りととめ覺

目出度 かしこく

記行も多し

日永のむらめぐり

時千嘉永六年

癸丑五月中旬認之

為女兒案内也

武橘庵白紙述之



参考文献

著秀子「寺子達の教科書『近邊村巡り』について」

『郷土つるみ』第五四号 二〇〇一年

『横浜の本と文化』横浜市中央図書館編

一九九四年